

目的 前回(1979本総会)に引き続き、所蔵者の判明している縮帳、織帳を通して、それらが作成された江戸末～明治・大正期の岩手県の染織をうかがおうとする。今回は県央北上川沿いの石鳥谷町「平源」および紫波町(推定)橋本氏の縮帳(いずれも盛岡市橋本美術館所蔵)2冊と、岩手県でも最も豪雪地帯とされている沢内村碧祥寺および紫根染で知られる岩泉町八重樫家所蔵の織帳各2冊ずつについて、前回の資料とも併せて比較した。

方法 縮帳の素材・染織の特徴、織帳の織り名・織り方の検討、所蔵者および古老からの聞きとり。文献調べ。

結果 まず県内4地域にのこる明治4～大正5年までの織帳合計8冊について検討した。なおこの外にもかなり多くの織帳が県内で使用されていたと推定される。明治4年の奥家の織帳は、当主忠太郎氏が殖産興業としての機織の専門知識を学んでいたことからうなづけるとして、それ以外は、それぞれの家で娘のためにていねいに書き写されたものであり織り方は主として日常用のものが多いが、中には10～12枚縮絨の麻の葉、松川菱、輪壺、朱子織など、かなり複雑なものもあり、当時の織りに対する熱意がうかがわれる。地域的・年代的にみると各々共通性、独自性が見出された。次に、縮帳は元来綿を産出しない本県では数が少ないとされている。今回の縮帳は自家用で本綿縮地織、絹縮細織が主であるが商家「平源」の縮帳には購入した本綿縮見本が多くあり、あるいは当時の日常着であったかと思われる。なお前回の縮帳とも比較して藍染絹細について検討を加えた。